

原発新検査の試験運用開始

抜き打ち、立ち入り自由に

原発が安全に運転・管理されているかを監視する国の検査の新制度が2020年4月に導入されるのを前に、原子力規制委員会は、実際の原発施設で試験運用を始めた。既に福井県の関西電力大飯原発で行い、1年半の間に全国計17原発で実施する。現行の検査式では、検査官が施設にいつでも自由に立ち入り、設備やデータを調べ、訓練を行い、規制委が視察した。中山伸介委員は検査官とともに、ポンベを背負った消防隊員らが、出火元の部屋の外から扉に排煙用ホースを取り付ける様子などを確認した。

現行の制度では、検査項目や日程などを電力会社に事前に通告し、立ち入りが制限されるエリアもあったが、16年に国際原子力機関（IAEA）から硬直的と指摘され、変更した。

中山氏は終了後、取材に「検査官が電力事業者と情報共有をすることが必要だ」と述べた。

新制度では、検査官は実務上内容や検査の所要時間、自由に備が深刻だったり、数が多い場合は、立入りを許す際には問題とされたり、5段階の総合評価で評議され、施設停止や運転再開の取扱いが厳しくなる。結果は年1回公表する。



原発の新検査制度の試験運用を視察する
原子力規制委の中山伸介委員（左端）
11日、福井県おおい町の関電大飯原発

特集記事は下記をご覧ください

北海道 危機時の機能維持課題

新電力「卸市場」地震で停止

北海道の全域停電の際、新規参入した電力会社の仕入れ先となる「卸電力市場」の北海道エリアの取引が20日間停止していたことが2日、分かっ

た。北海道電力が供給を肩代わりしたもの、同社も主力の発電所が被災するなどして供給力は盤石ではなく、電力危機時の市場機能維持に課題が残った。

新電力の多くは、卸市場で割安な価格で仕入れて低価格で提供し、大手電力と競う。北電は肩代わり期間中の販売価格を明らかにしていないが、新電力と今後、差額の扱いなどを協議する方向。北海道は新電力のシェアが高く、交渉次第では新電力からの反発も予想される。

卸電力市場は日本卸電力取引

所が運営し、電力の出し手は沖縄電力を除く大手電力9社を中心。新電力などは入れで電力を購入し、大手電力の送電線を使って顧客へ供給している。

北海道地震では、北電が供給力の低下から市場に電力を回す余裕がなくなったことから、日本卸電力取引所は地震発生当日の9月6日、北海道エリアの取

引を停止した。その後、発電所の再稼働が進み、卸市場に供給される電力にめどがついたことから、26日に取引を再開した。

経済産業省によると、工場など大口需要向けでは新電力がシェアを伸ばしている。中でも中・小規模部門だと北海道は約3割のシェアがあり、全国でもトップクラスとなっている。

物価見通しは、短観の一環で全国約9900社を対象に調べた。

人事
△アルテプロ（10月25日）
社長 塚本宏樹△取締役（社長）椎塚裕一
△東計電算（1日）取締役 磯崎奈保子
△退任 取締役根本和広
△中央自動車工業（9月30日）退任 取締役阿部啓

企業の物価見通し 1年後0.8%上昇

■9月調査 0.1%低下

日本銀行が2日発表した9月の企業の物価見通し調査は、全規模全産業の1年後の消費者物

価予測が、平均で前年比0.8%上昇となり、前回の6月調査から0.1%低下した。3年後と5年後は、いずれも前回と同じ1.1%上昇だった。

日銀が1日発表した企業短期経済観測調査（短観）は、代表的指標である大企業製造業の景

況感が3四半期連続で悪化した。慎重な景気判断が続き、値上げで顧客離れを招くとの警戒感は根強く、2%の物価上昇目標実現への道筋は険しい。

大企業の1年後の予測は、製造業が前回と同じ0.6%上昇、非製造業は0.1%高い0.7%上

昇だった。製造業の3年後と5年後は、ともに横ばいの0.8%上昇。非製造業の3年後は0.1%高い0.9%上昇、5年後は横ばいの0.8%上昇だった。

中小企業の1年後は、製造業、非製造業ともに横ばいの1.0%上昇だった。

純国産アルミホイールという選択

ルポ 新日鉄住金「タフブライト®」の挑戦

日本最大手の鉄鋼メーカー、新日鉄住金が、トラック・バス用に製造・販売する純国産のアルミ製ホイール「タフブライト®」。ホイールに輝きを求めるユーザーのニーズに応えて高輝度を実現。世界最軽量クラスで、スチール製に比べ2~3倍の耐久寿命を持つ。軽量化で積載量が増加したことにより、運送効率がアップ。燃費が改善される点も好評だ。輝度の高さが企業のイメージアップにもつながることから、運送業界や観光バス業界などでタフブライトを採用する企業が着実に増えている。そこで、ユーザーの声を聞くため、導入企業を訪問した。

第3回 ジェイアールバス東北

「持った瞬間、これまでにない軽さだとすぐにわかりましたよ」と笑顔で話すのは、JR東日本グループのバス会社、ジェイアールバス東北の仙台支店・車両整備・前田成人係長。タフブライトに初めて触れた20年近く前のインパクトが、いまでも鮮明に手のひらに残っていた。

ジェイアールバス東北は、国鉄の分割民営化後の1988年に設立された。東日本の東北自動車部の事業を引き継いだ。現在、宮城県仙台市に本社を置き、東北5

県内に5支店、3営業所、2事業所を開設し、高速および一般路線バス、貸し切りバス、定期観光バスを運行している。

同社がタフブライトを導入したのが2010年頃。以降、バスの更新や増やす際のバスメーカーへの発注時、ホイールはタフブライトを指定するようになり、現在運行中の高速車および貸し切り車約170台のうち、それを装着している車両はすでに半数を超えた。

「東北地方を主な運行エリアとする当社にとって最大の敵は、冬場の雪。それに対してもタフブライトは威力を発揮します」と前田さんは断言する。

東北地方の主要道路の路面には、自動で融雪剤を散布する機能が備わっている区間も少なくない。「その液中に含まれる塩分がどうしても付着しますが、洗車時、以前に使っていたアルミ製ホイールだと表面がコーティングされていたため、磨くことができませんでした。水洗いだけだと、運行を重ねると輝きも鈍くなります」と話す。

「それに対し、タフブライトはもとも



磨きあげたボディとホイールのバスが
東北各地を走る



空気圧も測定しやすく
安全管理も手厚くなる

とコーティングされておらず、すぐに磨いて塩分を落とすことができるので、いつまでも輝きが持続します。それどころか、磨けば磨くほど輝きが増すので、われわれもそれがうれしくてしっかり磨き、車両を入念に手入れする精神、ひいては故障のない車両での安全運行にもつながっています」と力強く語る。

ホイールの脱着、 空気圧の測定もなめらか

また、前田さんはタフブライトの特徴として、ホイール交換の作業性のよさを挙げる。「軽いうえに、取り付け、取り外しもしやすい構造で、するりという言葉がぴったりのなめらかさ」と述べる。

さらに、定期点検などでのタイヤの空気圧の測りやすさもタフブライトの決定的なメリットという。「以前に使っていたホイールは肉厚なので、測定器具の空気圧をはかる先端部が空気バルブまで届きにくく、作業効率の悪い姿勢や、器具の改造も余儀なくされました。それに対しタフブライトは、先端部が空気バルブに届きやすい厚さなので、作業時間もそれだけ短くすみます。また、器具に負担も与えないでの精緻な測定ができる、それ

は安全運行の重要なファクターです」と強調する。

さらに、ホイールの重量が軽いことは、車両の荷重を小さくすることにも役立っている。前田さんは、「おかげで車両の操作性のよさ、なめらかな走りなどの効果も感じられ、それは安全だけでなく燃費効率のよさにもつながっているようです」とつけ加える。

かねてより東北各地は国内旅行でも人気の高い地域で、それに加え、ここ数年は海外からの旅行客も増え、ジェイアールバス東北も、保有するバスのフル稼働が続いている。そのような中、前田さんは、「お客様にきれいなバスに気持ちよく乗っていただき、かつ安全運行のために新日鉄住金さんのタフブライトは欠かせません。ホイールの輝きと共に、お客様からの信頼もさらに高めていきます」と改めて誓った。



ホイール交換の作業性のよさを
強調する前田成人さん

